

4. KJ法をやってみよう

1 KJ法とは？

〔1〕KJ法の由来

「KJ法」とは、蓄積された情報から必要なものを取り出し、関連するものをつなぎあわせて整理し、統合する手法の一つです。

カード（紙片）を活用するところに大きな特徴があり、内容や質がまちまちな情報をまとめ、全体を把握するのに有効な技法です。

日本の文化人類学者・川喜田二郎氏（元東京工業大学教授）が考案した創造性開発（または創造的問題解決）の技法で、川喜田氏の氏名の頭文字をとって“KJ法”と名付けられています。

このテキストでの説明は、主として川喜田二郎氏の著作（『発想法』中公新書、1967年；『続・発想法』中公新書、1970年）による。

〔2〕KJ法の汎用化

KJ法は、もともと川喜田二郎氏が文化人類学者としての自分自身の学術調査のデータをまとめるため、および、調査団のチーム作りのために考案したものです。

その後、川喜田氏自身および周囲の研究者たちの協力によって、さまざまな発展型を生み出しており、個人の思考、会議での意見集約などに用いられ、例えばまちづくりの分野などでも計画段階での住民意見の集約や、設計段階における関係者の意志統一などに応用されています。

〔3〕ブレインストーミングとKJ法

ブレインストーミングは、新たなアイデアを生み出すための方法の一つです。

KJ法は、ブレインストーミングなどによって得られた発想を整序し、問題解決に結びつけていくための技法です。

4) KJ法の基本

まずは、ブレインストーミングなどで出されたアイデアや意見、または各種の調査の現場から収集された雑多な情報を1枚ずつ小さなカード（紙キレ）に書き込みます。

次に、それらのカードの中から近い感じのするもの同士を2、3枚ずつ集めてグループ化していきます。

続いて、それらを小グループから中グループ、大グループへと組み立てて図解していきます。

さらに、必要に応じて図解を文章化していきます。

こうした作業の中から、テーマの解決に役立つヒントやひらめきを生み出していきます。

ここでいう“グループ”とは人間の集団ではなく、カテゴリー(領域)と解釈されたい。

2 KJ法の手順

〔1〕ステップ1. 『キーワード収集(カード記録)』

「探検」と呼ばれる段階で、探検には、外部探検と内部探検とがあります。外部探検とは、様々な目的による調査の現場で情報や事実を収集することです。内部探検とは、関係当事者の頭脳の中を探検することで、各自の頭脳に蓄えられた知識や経験をブレインストーミングなどによって吐き出すことです。

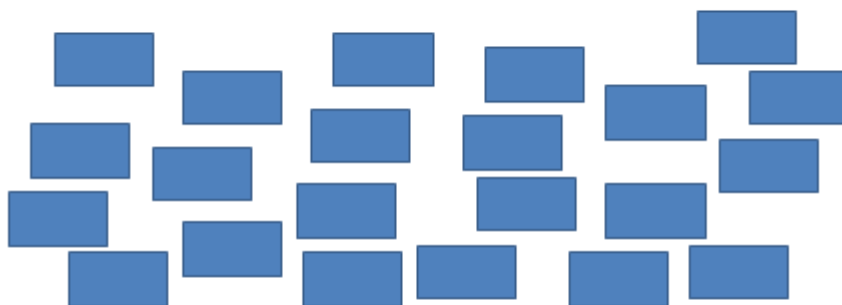
収集された情報は1つ1枚ずつ、小さな「カード」に書き込んでいきます。

※カードへの記録の仕方

- ①テーマを決め、関連すると思われる事実や意見をできる限りカードに記録する。
- ②この際、内部的な情報だけではなく、外部から収集した情報も扱う。
- ③記録するときは一枚のカードに一つの情報を記録するようにする。
- ④たとえ“もやもや”したままでも、とにかく書き出していく。

「カード」には【ポストイット】を用いると便利。あるいは、本学ホームページ「リエゾンゼミ・ナビ『学びとの出会い』」の「その他の資料」の「KJ法紙片(ラベル)ひな型」(A4版)をB4版に拡大コピーし、事前に学生に渡して切って持ってきてもらう。

KJ法 ステップ1 カードひろげと内容確認・共有



この段階がとても大切であるため、十分に時間をかけること。

- ① 生み出されたたくさんのカードをバラバラなままディスプレイする
- ② バラバラなカード群の語りかけを素直な気持ちで聞き取っていく
- ③ 内容を確認し合う(リーダーが読む、本人が説明するなど)
- ④ 内容の是非は論じないが、一部修正は可

〔2〕ステップ2. 『グルーピング』

カードのグループを編成していく作業で、さらに次のような段階に分けて進めていきます。

1) カードひろげ

カード群を机の上などにディスプレイして、1枚1枚のカードに書かれた内容を丹念に読みとっていきます。

カードの心に聞き、カードが言わんとする言葉の奥を汲み取る。

2) カードあつめ

- ・近い感じのカードを集めます。
- ・たくさんでなくともよいです(2、3枚ずつでも構わない)。
- ・いわゆる“離れザル”、“一匹狼”は無理にどこかへ入れないようにします。
- ・あわてず、ゆっくり、息の長い根気で。

3) 表札づくり

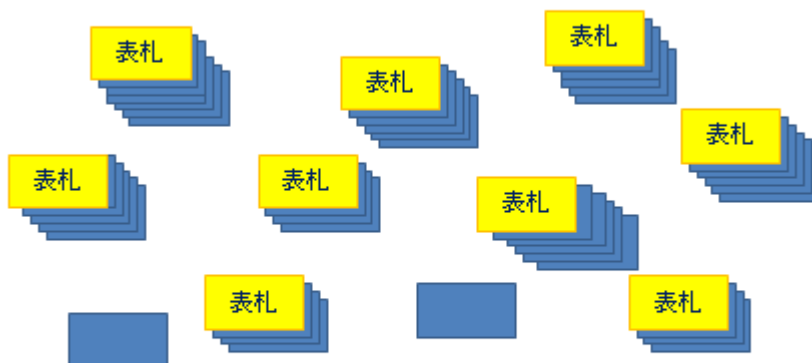
- ・カードのグループに「表札(タイトル)」をつけます。
- ・カードたちの意味(心)をびたりと言い表します。
- ・ソフトでズバリの表現で。
- ・元の言葉の土の香りを残します。

表札は新しいカードに赤字や青字などで書く。

- ・カードのグループは、まず小グループを作り、次に小グループ同士で中グループを、そして中グループ同士で大グループを作っていきます。

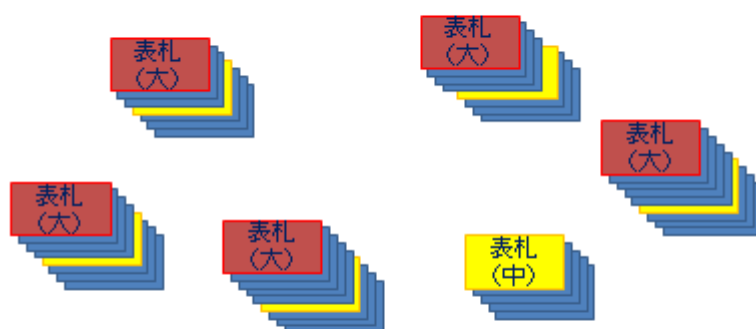
色分けして書き、クリップや輪ゴムで束ねていく。

KJ法 ステップ2 グルーピング



- ①この段階では枚数程度とし、大きくまとめようとしない(まず小グループを作る)
- ②1枚のまま残る“一匹狼”があっても、無理に他のグループと一緒にしない
- ③各グループの内容を表す「表札」をつけて、グループのカードの上のせる
- ④それぞれのグループのカードを束ねておく(輪ゴム、またはポストイットの使用)

KJ法 ステップ2 小グループから中・大グループへ



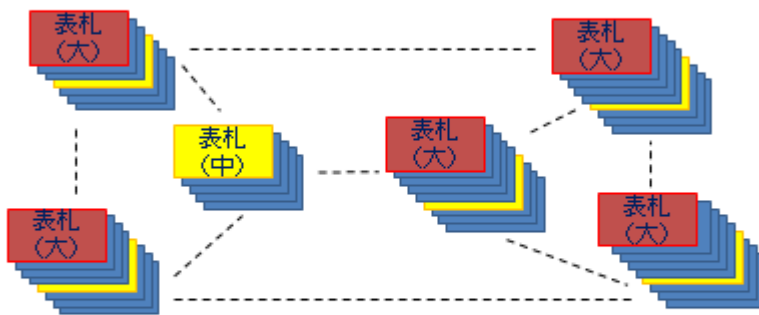
- ①「表札」を眺めながら、互いに親近性のある小グループを中グループにまとめていく
- ②この作業を何度か繰り返し、十個前後の大グループにまとめる
- ③カード全体の2/3程度がまとまってきたところで、区分けと同時に表札づくりを進める

〔3〕ステップ3. 『空間配置』

中グループや大グループへと組立てられて、クリップや輪ゴムで束ねられたカードの束を模造紙などの上で空間的に配置をして、姿・形をもったものにしていきます。

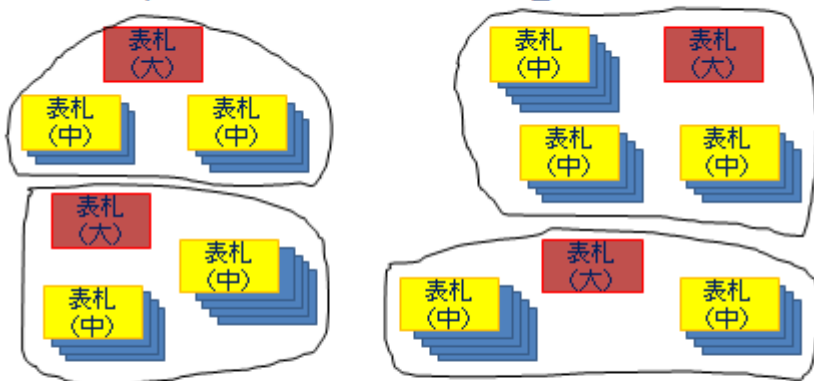
内容の近い束を近くへ。
「目的と手段」「原因と結果」などの“ストーリー”をつぶやきながら進める。

KJ法 ステップ3 空間配置



- ①グループ相互の流れをつくりながら、論理的整序の段階に入る
- ②グループ間に論理的な関連性ができるよう大グループのカードの束を並べ替える
- ③空間配置の意味する内容を、ストーリーのようにつないでしゃべれるようにする

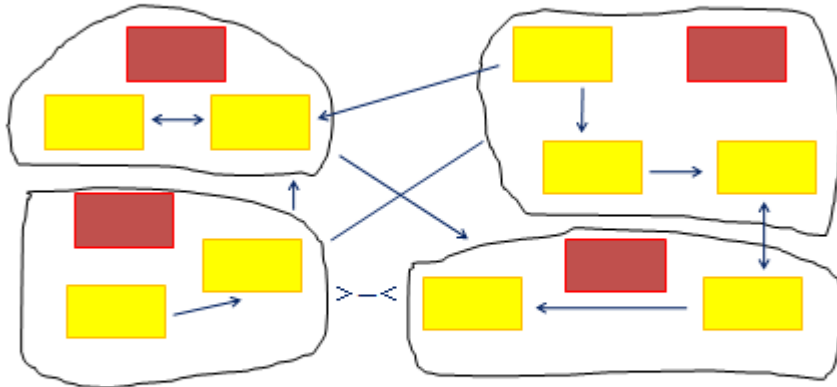
KJ法 ステップ3 表札の「はらわた」を出す



- ①空間配置ができたなら、カード束の間隔を広げ、それぞれ1段下のグループ段階までほぐしてみる
- ②その上で、隣接する大グループ(およびその1段下の束)との親近性に注意しながら、もとのグループの範囲内で、空間配置を行う

徐々に輪ゴムやクリップの束を解き、“はらわた(カード群)”を出していく。

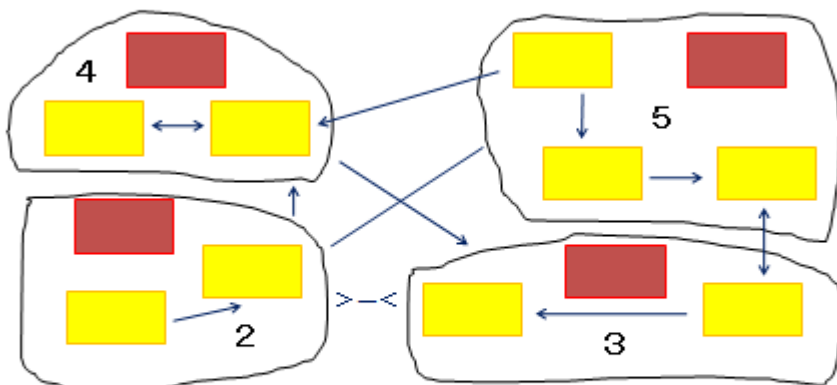
KJ法 ステップ3 関係を図解(別紙へ写し取る)



グループ間の関連の内容を示す記号を使って、空間配置の論理関係が分かるようにする

—:関係あり →:原因・結果 ↔:互いに因果的 >—<:互いに反対

KJ法 ステップ3 テーマの選定

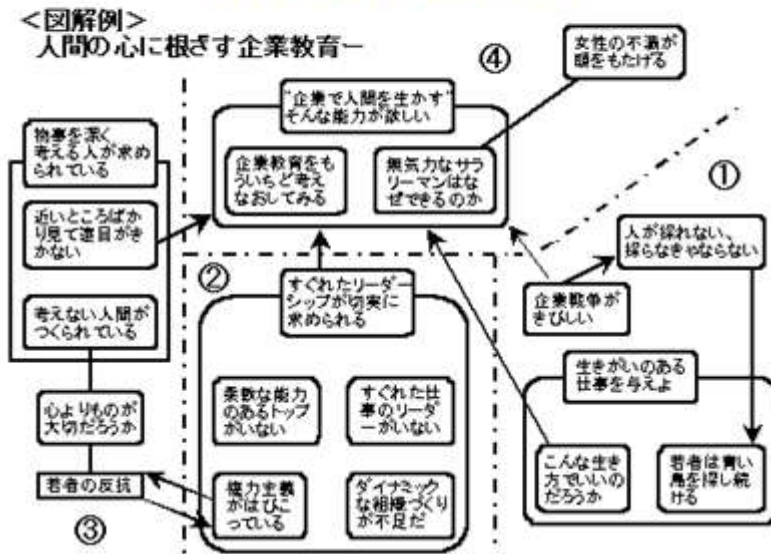


- ①すべての大グループの中で、どれが重要と思うか、各自最高5点から1点の順で点数をつける(6番目以降は点数をつけなくてよい)
- ②総得点が最も高い5つの大グループを、主要な研究テーマとする
- ③中グループ等が主要な研究項目となり、図解も重要な指針を与えてくれる

〔4〕ステップ4. 『A型図解』

輪どりや線などで、グループ同士の関係を表示し、全体が姿・形を持った図解となるようにしていきます。

KJ法 ステップ4 A型図解化の例



【5】ステップ5. 『B型文章化』

- 1) A型図解を元にして論文や記事などに文章化していきます。
- 2) 「B型」として簡略化して口頭で発表説明します。
- 3) GBS (グラフィカル・ブレイン・ストーミング) として、図解を土台に再度ブレインストーミングを実施し、発想を発展させていくこともあります。

この段階でうまく文章化できない場合は、図示の段階に原因があると考えてもう一度やり直す必要がある。

それまでの作業の途中で得られたヒントなどは新しくカードに書き留めて、同じ手順を繰り返し、内容を深めていくことも可能である。これについては「累積KJ法」と呼ばれている。

◇ KJ法運用上の留意点

KJ法は、次のような使い方をすると効果的です。

- ① 問題の正体をはっきりしない時。それを明確化する。
- ② 周辺情報を幅広く収集する。
- ③ カード化された情報は、バラバラなままディスプレイする。
- ④ バラバラなカード群の語りかけを素直な気持ちで聞き取る。
- ⑤ バラバラな情報群の中から、次第に紙切れたちが集まってきて、問題が形成され、構造化されるように思考する。
- ⑥ グループで取り組むことによって、衆知結集の効果や、チーム作りの効果を期待できる。